

『パイドン』における想起説

—類似性の概念に着目した一考察—

小野木 芳 伸

I

プラトン思想において、学ぶことは前世の知を想起することであるという想起説が重要な位置を占めるということは、ほぼ衆目の一致をみているところであると思われるが、『パイドン』の想起説は一方で『メノン』におけるそれとは異なり明瞭にイデア論（中期プラトンの根本思想）の脈絡で語られ、他方で『パイドロス』におけるそれとは異なりミュートスを交えぬ論理的な叙述がなされるがゆえに、その説明は中期プラトン思想全体の理解に少なからぬ貢献を為すことが期待される。そこで以下われわれは、『パイドン』の想起説を特にイデア論との連関で吟味することとしたい。

ところで、『パイドン』の想起説には解釈困難な箇所が幾つかあるが、それらは未だ十分な解決をみえない。今それら難読箇所のすべてを吟味することは不可能ゆえ、われわれとしては以下二つの問題を選び、それらの箇所が解釈困難とされてきた背景には共通して想起説における重要な前提が従来の解釈では見落とされてきたという事情がある、という点を示す試みを行なうこととしたい。

まず、問題となる箇所の概要を述べる。『パイドン』の想起説はその構造上、堅琴や衣服を見てその持ち主である愛人を想起する(285a-c)とか、シミアスという人を見てケベスという人を想起する(289e-10)とか、

あるいは馬の絵や豎琴の絵を見て人間を想起する (369c) とか、シミアスの絵を見てケベスを想起する (369c) とかといった直接アイデアの登場せぬ事例を論じる前半部 (371c) と、等しい諸事物を見て等しさのアイデアを想起するといったアイデアの想起を論じる後半部 (421-5c) とに二分することができる。前半部で想起される物が個物であるのに対して、後半部で想起される物はアイデアであるというように区分して、さしあたりは、よいであろう。ここで、後半部との連関では、前半部のうちもつとも重要な事例は次のものであると考えられる。すなわち、〈シミアスの絵を見てシミアス本人を想起する〉 (369-10) というのがそれである³³。他方、アイデアの想起を論じる後半部の事例をわれわれは、〈等しい諸事物から等しさのアイデアを想起する〉と定式化しておくこととする (cf. 74c7-9)。

ここで以下のわれわれの考察の大前提を明確にしておきたい。それは、前半部の代表的事例である〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉が何らかの意味で、アイデアの想起を論じる後半部の事例〈等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起〉の類比として構想されているということである。というのも、〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉と〈等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起〉とはテクスト上ほぼ連続した箇所位置するだけでなく、以下に述べるように、両者はともに「似た物からの」想起であり、しかも〈想起させる物は想起される物に類似性の点で劣っている〉という思惟を必然的に伴うといった限定付きの、似た物からの想起なのである。こうした共通性を見れば、何らかの意味で〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉が〈等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起〉の類比であるというわれわれの前提は、考察の出発点としてきわめて妥当なものであろう。さらに、〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉において、想起させる物(シミアスの絵)と想起される物(シミアス本人)との関係は、これを「像—本

物”関係と性格づけてよいと考えられる。³⁾この種の想起をわれわれは、(像Pからする本物Pの想起) (Pはさしあたりシミアスなど)と一般化しておくこととする。ここからして先の類比関係はやや限定され、(等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)は像—本物の関係の類比として構想されている (cf. 76e2: ἀπεικάζομεν; Respublica 511a7) としう理解がわれわれの大前提ということになる。⁵⁾

II

発端となる問題は次のとおりである。前半部の代表例(シミアスの絵からするシミアス本人の想起)から後半部の(等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)へ移行するに際して、プラトンは次のような断り書きを挿入している。すなわち、「想起は似た物からのものであることもあれば、似ていない物からのものであることもある」(74a2-3)。つまり、さしあたり想起には、似た物からの想起と似ていない物からの想起との二つがあることになる。ここで前半部の(シミアスの絵からするシミアス本人の想起)も (cf. 74a2: κατὰ πᾶντα τοῦτα) 、後半部の(等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)も (cf. 74b3: ἕκαστου ἐκείνου) ともに似た物からの想起に区分されている。⁶⁾さらに、似た物からの想起には(想起させる物が想起される物に類似性の点で劣っている)という思惟が必然的に伴うとされるのであるが(74a7c) 、この思惟は(シミアスの絵からするシミアス本人の想起)についても(74b) (cf. 74b1) (等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)についても(74d-75d) 語られている。つまり、前半部の(シミアスの絵からするシミアス本人の想起)も後半部の(等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)も似た物からの想起であり、しかもともに(想起させる物(シミアスの絵、等しい諸事物)が想起される物(シミアス本人、等しさのアイデア)に類似性の点で劣

っている」という思惟が必然的に伴うという限定が付いている。こうしたテクスト上の状況を見れば、想起説において類似性の概念がきわめて重要な役割を果たしていることは明らかであろう。⁷⁾

ところが後半部では、これに反するような状況が見られる。すなわち、等しさのアイデアが等しい諸事物とは異なることが確かめられた(「ギ」)後、まず「これら等しい事物から、これら等しい事物はかの等しい物〔＝等しさのアイデア〕とは異なるにもかかわらず、我々はかの等しい物の知識を思惟しかつ捉えてしまっているのだ」(「ケ」)というように等しさのアイデアの想起が語られるのであるが、これに続けて次のように言われるのである。「それでは、かの等しい物〔＝等しさのアイデア〕はこれら等しい事物に似ているか似ていないかのどちらかであろうか?……だが、それはどちらでもよい。人が或る物を見て、この視覚から別の物を思惟するかぎり、その別の物が似ていようと似ていまいと、それは想起として生じているということは必然的なのだ。……」(「ケ」)つまり、等しさのアイデアの想起にあつては、等しさのアイデアが等しい諸事物に似ているか否かはどうでもよいとされているのである。

類似性の概念をめぐる以上二つのプラトンの言い方は、明らかに相互に不整合であると見える。すなわち、一方で前半部の(「シミアス」の絵からするシミアス本人の想起)も、後半部の(「等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)も、ともに似た物からの想起に区分され、そこでは類似性の概念がきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、他方で後半部の(「等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起)が述べられるに際しては、等しさのアイデアが等しい諸事物に似ているか否かはどうでもよいとされ、類似性の概念は軽視されているとしか思われない。一連の想起の議論において、類似性の概念は一方ではきわめて重視され、他方ではまったく軽視されているわけである。ここにはプラトンの明白に矛盾した態度が見て取られるので

はないか？⁵⁾ これが第一の問題である。

われわれとしては、類似性をめぐるプラトンのこの二つの態度は矛盾したものではなく、逆に中期プラトン存在論の重要な一側面を反映するものであると考える。まず、前半部と後半部に通底する類似性の概念をもう少し詳しく検討してみたい。想起説において、似た物からの想起が語られるに際しては、〈想起させる物(シミアスの絵、等しい諸事物)が想起される物(シミアス本人、等しさのイデア)に(類似性の点で)劣って〉いないかどうかと思惟することが必然的である、という但し書きが付いている。このことは後半部の等しさの事例についても妥当すると思われる(c.f. 74d5-7: d9-e4; 75a1-3: a11-b2; b7-8)が、その内容をとりわけ前半部の〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉、一般的には〈像からする本物の想起〉について言えば(c.f. 74a2-8)、像(シミアスの絵)が本物(シミアス本人)に似ているという認知は、〈像が本物に劣っている〉という思惟と不可分である、ということになる。

ところで、像Pが本物Pに〈劣っている〉という思惟の成立には、〈それはPである〉に何らかの点で〈それはPではない〉を対置することが必要であろう。そのような対置はじつさいに等しさのイデアの想起においては、等しい木材や石材は等しいと見えることもあれば等しくないと見えることもある、という形で行なわれている(Anaximenes)。等しさのイデアの想起が〈像からする本物の想起〉であるというわれわれの大前提からすれば、同じことが像について言えるはずである。じつさい、シミアスの絵について、〈それはシミアスであるともシミアスでないとも見える〉と言うといった事態は十分に考え得るところである。このようにして〈……である〉という実在を〈……であるとも見える〉という見えに還元する手続きは、一種の懷疑といってもよいであろう。また、〈像Pが本物Pに劣っている〉という命題はほとんどつねに「思惟 *ennoia*」

(746:d9:75a1:a5:a6:a11)の内容として現れる以上、この懷疑は漠然とした疑いではなく、自覚的懷疑というべきであろう。つまり、いかに本物そっくりに描かれた肖像であれ写真であれ、その内容^⑤については「これはシミアスを描いたものではない」と想定してみることがつねに可能なのであり、この想定により当の絵姿は見えに還元されるのである。以上から、像Pが本物Pに「似ている」という認知は（像Pが本物Pに劣っている）という思惟と不可分である以上、想起説での「似ている」は事実上つねに「似てはいるが劣っている」を意味し、これは（それはPであるともPでないとも見える）と表現される自覚的懷疑を含蓄するものであるとわれわれは考える。

ここでわれわれはさらに、『パイドン』の想起説における「似ている」という語の用法に関して、特異な事実を指摘しておきたい。すなわち、「似ている」という形容詞は、先の問題提起で引用した（等しさのアイデアが等しい諸事物に似ているか否かはどちらでもよい）という一箇所（*751e*）を除いては、すべて想起させる物（シミアスの絵、等しい諸事物）の方に適用されており、想起される物（シミアス本人、等しさのアイデア）の方に用いられることはけつてないという事実である。^⑥つまり、『パイドン』の想起説において、想起させる物（シミアスの絵、等しい諸事物）が想起される物（シミアス本人、等しさのアイデア）に似ていると言われることはあつても、その逆、すなわち想起される物（シミアス本人、等しさのアイデア）が想起させる物（シミアスの絵、等しい諸事物）に似ていると言われることは右の一箇所を除いては一度もない。ここからわれわれは、「似ている」というのは単に想起させる物（像）に付随する印象のようなものではなく、想起させる物（像）の想起させる物（像）としてのいわば（アイデアに対する個物に対応する）存在論的本質規定なのではないか、と予想する。

III

この予想を確かめるためわれわれは、『バイドン』の想起説に關する、研究者間では周知の問題に着目したい。その問題とは以下のようなものである。想起の議論の冒頭でプラトンは想起に次のような一般的定義を与えている。すなわち、「人が或る物を見るなり聞くなり他の感覚をするなりした上で、その物を知るだけではなく、それについて同じではなく別の知識が存するところの他の物を思惟もするとき、その人は、それについて思惟を捉えたところの物を想起したのだ。」(362c)ここで「別の知識」という想起の条件がどういう意味合いを持つのが不明とされてきたのである。つまり、一方で(想起させる物と想起される物の)知識の相違を対象の数的個別的相違——この場合、シミアスの絵とシミアス本人とは別の対象になる——に対応させてしまえば、想起させる物(シミアスの絵)の知識と想起される物(シミアス本人)の知識とは自動的に別であることになり、「別の知識」という条件の付加は余計なものとなる。他方、「別の知識」というのが想起させる物と想起される物の概念ないし内容上の相違に対応するとすれば、前半部の(シミアスの絵からするシミアス本人の想起)において、想起させる物(シミアスの絵)の知識と想起される物(シミアス本人)の知識とは同じ(シミアス)を内容とすることになり、「別の知識」という条件はプラトン自身により破られてゐることになる。¹²⁾

このように、想起の一般的定義における「別の知識」についての解釈はディレンマ的状况に陥つてゐるのであるが、われわれとしては類似性の概念に關する先の予想こそ第三の解釈を可能にするものと考ええる。前節でわれわれは、想起説における「似ている」というのは「似てはいるが劣つてゐる」を意味し、これは自覚的懐疑の表現であると理解した。その上で、「似ている」の用法の特異性から、「似ている」というのは

想起させる物(像)の存在論的な本質規定ではないかとの予想を立てた。この予想に従うと、似た物からの想起において、想起させる物(像)とは、存在論的には、想起される物(本物)に「似てはいるが劣っている」という思惟が含意する自覚的懐疑を容れる物であると解される。想起させる物(像)の本質は前記の懐疑を容れる点にあるというこの見地に立てば、想起される物(本物)の本質を、そうした懐疑を容れぬという点に求めるのはきわめて自然な解釈であろう。

ここで注意すべきは、イデアの想起を論じる後半部において、想起される物(イデア)とその知識とが同じ議論(Theory)の中でも「思惟する *intelligere*」という動詞の目的語になっているという点である。¹³これは、想起説においては、知識とその「対象」が何らかの意味で同等であることを示唆していると見てもよいであろう。

そこでわれわれは、想起の一般的定義における「別の知識」というのは、とりわけ似た物からの想起で顕在化する、想起させる物(像)と想起される物(本物)との存在論的な区別を表現するものであると理解する。¹⁴つまり、想起させる物(像P)にあつては、その知識が、〈それはPである〉という知識内容を〈それはPであるともPでないとも見える〉と還元する懐疑を容れるのに対して、想起される物(本物P)にあつては、その知識はそうした懐疑を容れぬ、という区別である。つまり、想起させる物(像)と想起される物(本物)との区別が数的個別的ないし概念的内容的な区別としてあらかじめ前提された上で、両者についての知識の区別がこれに対応した形で成立するのではなく、むしろ逆に、知識の区別が想起させる物(像)と想起される物(本物)との区別を定めるかのように、理解すべきなのである。想起させる物(像)と想起される物(本物)の区別とは、数的個別的な区別でもなければ概念的内容的な区別でもなく、その知識が前述の懐疑を容れるか否かという、

知識の観点から為される区別であるというのが、われわれの理解である。

IV

しかし、(1)なぜ想起させる物(像)と想起される物(本物)との間に、概念的内容的な区別はともかくも、数的個別的な区別とも異なる知識上の区別が語られねばならないのか？ また、(2)〈それはPである〉を〈それはPであるともPでないとも見える〉に還元する懐疑を容れぬ知識はじつさいに存在するのか、存在するとすればそれは具体的にはいかなるものなのか？ 予期されるこれら二点の疑問に答えることで、本論の締め括りをしたい。その際、われわれとしては、この考察を始めるに当たつての大前提、すなわち前半部の〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉、一般的には〈像Pからする本物Pの想起〉が後半部の〈等しい諸事物からする等しさのアイデアの想起〉の類比になっているという前提に基づいて解決への糸口を探ることにしたい。

まず問(1)を取り上げると、前半部の〈シミアスの絵からするシミアス本人の想起〉だけを見れば、シミアスの絵とシミアス本人の区別は常識的に数的個別的な区別として解釈され得るにせよ、この想起を後半部の類比とすべく〈像からする本物の想起〉と一般化した場合、像シミアスと本物シミアスの区別は単に数的個別的な区別とみなし得るであらうか？ 同じ問を本物の方に焦点を絞つて言うと、本物シミアスというのは、人が眼前に見出だすところの身体としてのシミアスと同一視してよいのであろうか？ われわれはこうした理解はきわめて疑問であると考ええる。なぜなら、たとえば人が久しぶりにシミアスに出会つた場面を考えると、〈これは(シミアスであるとも)シミアスでないとも見える〉という自然な疑いを時に抱くことが

あると思われる以上、自覚的な疑いにあつては身体としてのシミアスを厳密な意味での本物シミアスと断定するのは常に困難となるからである。¹⁶では本物のシミアスというのはいかにして確定されるのか、と再び問うたとき、厳密な意味での本物のシミアスというのは、それについての知識が〈これはシミアスではないとも見える〉という疑いをいっさい容れぬような存在である、というように、知識の観点によつて本物のシミアスを像から区別し確定するという仕方は妥当な回答であると思われる。このことを一般化して言うなら、本物Pとはその知識が〈これはPではないとも見える〉という懷疑をいっさい容れぬような存在であり、像Pとはその知識が〈これはPではないとも見える〉という懷疑を容れるような存在であるということになる。つまり、〈像Pからする本物Pの想起〉が〈等しい諸事物からする等しさのイデアの想起〉の類比であるというわれわれの大前提に沿つて言うと、像Pと本物Pの区別はあらかじめ与えられたものではなく、感覺的世界でPと判定された所与に対して〈これはPではないとも見える〉という自覚的懷疑が行なわれることで〈本物Pに似てはいるが劣っている〉物として像が現れると同時に、本物、すなわちその知識がそうした懷疑をいっさい容れぬような存在が不在として示されるというようにして、当の区別はあくまで自覚的懷疑に対して姿を現すものであるということになる。¹⁷

しかし、ここで前述の間(2)が問題となる。つまり、本物Pを定めるような知識、すなわち〈これはPではないとも見える〉という疑いをいっさい容れぬような知識がじっさいに存在するのか、存在するとすればそれは具体的にはいかなるものなのか、という問題である。シミアスについて言えば、〈これはシミアスではないとも見える〉という懷疑をいっさい容れぬ知識とは具体的にいかなるものであるのか、という問題である。これに対してわれわれは、『パイドン』に直接記述されていないものの、『国家』において天上の

範型と地上の国家との間の關係を描く比喩を手掛りとして、次に述べるような類比を提案したい。すなわち、哲學者たる守護者が天上の範型を見ながら地上の國家を「描く」という『國家』での記述(484c-d:500d-e:501a-c)を参考にして、「モデルを見ながら像を描き、つ、つ、ある、画家」という存在をわれわれが想定すると、この画家の描くという作用は前述の懷疑をいっさい容れぬ知識(ただし「技術」ないし「作る作用」という意味合いでの知識)とみなし得る。この画家以外に像シミアスを見る者は、それが本物に「似てはいるが劣っている」と言い得るし、「それはシミアスではないとも見える」と疑い得る。しかし、まさに描き、つ、つ、ある、かぎりでの画家が「モデルは像に似て(はいるが劣つて)いる」と言うのは無意味である。つまり、この画家にとつてモデルは像と内容上同一なのであり(あるいはむしろ、この画家がモデルと像の兩者を外から見比べる視点に立つことがいわば定義上けつてないことを考慮すると、像を描くことにより自己同一性を實現しているのであり)、そのことは、外から兩者を見比べる第三者から見れば像がどれほどモデルに似ていなかろうと、まったく変わりはない。ここにはそもそも似ている／似ていないの區別が入り込む余地がないのである。その意味で、「同一である」ということと「似ている」ということは、一見したところでは似ているものの、いわばまったく異なるカテゴリーに属する事柄なのであり、一方が他方に還元されるものではない。つまり、本物とは、数的個別的に、あるいは概念的内容的に、あらかじめ像から區別されているものではなく、画家が像を描くという現勢的作用(知識)こそが本物と像の存在論的區別を創出するものである。ここで、知識が本物(と像の區別)の本質を定めるといふ点を考慮すれば、本物とはまさに像を産み出す存在のことであると言つてもよいであらう。

前半部の(像Pからする本物Pの想起)は、こうした知識の相違という観点から理解されてこそ、後半部

の（等しい諸事物からする等しさのイデアの想起）の類比を成すとわれわれは考える。⁽¹⁸⁾

註

- (1) 以下、「想起説」と言えば『バイドン』でのそれを指す。
- (2) テクストは Burnet 版(OCT旧版)に拠る。また、以下『バイドン』からの引用については書名を省くこととする。
- (3) Cf. D. Gallop, *Plato Phaedo*, Oxford, 1975, p. 118, ad 73e1-74a4.
- (4) Cf. M. Morgan, "Sense-Perception and Recollection in the *Phaedo*", *Phronesis* 29(1984): pp. 237-251, p. 245.
- (5) 『国家』の〈線分の比喩〉(509c-511e)では、真か否かという見地において、像が本物に対する関係は、臆見の対象が認識の対象に対する関係と同様であるとされている(510a8-10)。なお、この箇所および本文中に挙げた *Republica* 511a7-15 J. T. Bedu-Addo, "Sense-experience and the Argument for Recollection in Plato's *Phaedo*", *Phronesis* 36(1991): pp. 27-60, p. 35, n. 10 に引用されている。
- (6) Morgan, *op. cit.*, p. 240; p. 244, n. 8.
- (7) Cf. J. Gosling, "Similarity in *Phaedo* 73b seq.", *Phronesis* 10 (1965): pp. 151-161, p. 153 sq.
- (8) この矛盾を重視して、前掲 74c11-d3 のテクスト全体を後代の挿入とみなす校訂者さえ存在する(R. D. Archer-Hind, *The Phaedo of Plato*, London, 1894, p. 38, ad loc.)。
- (9) あらかじめ断っておくと、以下シミアスについては像—本物関係を語る際、像と本物の間の差異をわれわれは「存在論的」差異と呼び、像と本物の両者にさしあたりは共通する(シミアス)という内容(この「共通する内容」に

関しては困難な問題が存する〔本論四一頁参照〕が、今は措くをわれわれは「内容」と呼ぶ。

- (10) 『パルメニデス』第一部では、イデアとそれを分有する事物とについて、後者が前者に似ている以上前者が後者に似ていることも必然であるという同意がなされた(325b)上で類似性の原因として別のイデアが立てられ、そこから無限遊行が導かれるという形で、いわゆる「イデア論批判」が遂行される(32c-133e)。そこで批判される「イデア論」がプラトン本来のそれではないという点については、藤沢令夫『イデアと世界』(岩波書店、一九八〇)九六一―一四五頁参照。但し、二二四―二二五頁では、同箇所について別の角度からの分析が為されている。

- (11) Cf. Gallip, *op. cit.*, p. 117.

- (12) Cf. J. L. Ackrill, "Anamnesis in the Phaedo: Remarks on 73C-75C", *Phronesis, Supplementary Volume I* (1973) : pp. 177-195, p. 185. 当該箇所の解釈を以上のように二種の解釈の対立として整理したのはわれわれであることと断っておく。その他の解釈として、J. Burnet は「別の知識」に該当しない知識すなわち同じ知識の対象として反対の二者(偶数/奇数、光/闇など)を挙げている(Plato's *Phaedo*, Oxford, 1911, ad 73c8)が「そうすると「別の知識」という条件が前後の文脈とどういう関係を持つのが不可解となる(Cf. Gallip, *op. cit.*, p. 117)」。また、R. Hackforth は「たとえば一人の人間についての知覚性状と、その知覚性状が人に思い出させはするが現に知覚されてはいない情報とは、両者がその人間についての全般的知識に属するものであるがゆえに、同じ知識の対象になる」と言及(Plato's *Phaedo*, Cambridge, 1955, p. 67, p. 4)が、この解釈ではプラトンが「別の知識」の例として挙げる「人間についての知識と豎琴についてのそれ」(73d8)の中の人間と豎琴がなぜ同じ知識の対象にならないのか、また、なぜこの意味での同じ知識が想起にあつて排除されねばならないかが不明となる(Gallip, *loc. cit.*)。

(13) イデアの知識・74c8^o イデア・74b6:cf. 74d1^o。他方、想起させる物についても、74c7では「これらの等しい物」であるのに対して 74d1 では「この感覚」となっており、「プラトン」は感覚する行為と感覚される対象とをまったく区別して「いな」という指摘がなされている(Gallion, *op. cit.*, p. 125 sq., ad 74c7-d3)。この観点からすると、右に(中性単数であるがゆえに)イデアを指示する箇所としてわれわれが暫定的に挙げた 74d1 の *ἐπιπέθε* は、「感覚」と対比されているがゆえに、イデアではなくイデアの知識を指す可能性も否定できない。

(14) *Pace Gallion, op. cit.*, p. 118, ad 73c4-d11.

(15) このような言い方をあえてしたのは、知識の相違を対象の相違に還元するような受け取り方をされぬためである。より正確に言えば、想起される物(本物)の知識について後述(註(19))するように、知識作用は或る意味でその「対象」により規制されるのであるから、知識はその対象により、あるいは知識の区別は対象の区別により、成立すると言うべきであろう(cf. *Respublica* 438d; 477c-d)。要点は、異なる知識は対象を異にすると同時に知識作用それ自体としても異なるということである。

(16) Cf. *Timaeus* 27c。ここでは友人クリトンに「君をどう埋葬しようか」(27c)と尋ねられたソクラテスが、「私というのはこのソクラテス、すなわち対話し、今言うことの各々を指示しているソクラテスである」(27c)の、「クリトンは少し後に自分が見ることになる死体が私だと思っている」(28d)と慨嘆している。ここには、単に「見られる」ソクラテスは本物のソクラテスではない、という含意が読み取られる。またそこから、本物のソクラテスはただただ見られる物としてのソクラテスではない、ということも容易に推察されるところである。

(17) じつさい、『国家』では、美のイデアと美しい感覚的諸事物について、次のように二種の認識者が対比されている(476c-e)。すなわち、美しい感覚的諸事物の存在のみを認め美のイデアの存在を認めぬ者は、「何かに似ている(476c-e)。

物(像) $\tau\acute{o}$ $\theta\acute{\upsilon}\lambda\alpha\sigma\acute{\alpha}\nu$ $\tau\acute{o}\nu$ (476c6) を似ている物(像)とは認めず、これを「(像が)それに対して似ているところの物(本物) $\theta\acute{\nu}$ $\epsilon\acute{\upsilon}\lambda\epsilon\upsilon\sigma\iota$ 」(c7)と取り違える者であるとされ、「夢を見ている」と言われる一方、美のアイデアとそれを分有する諸事物とを見ることができ、両者を取り違えることのない者は「目醒めて生きている」と言われている (cf. Bedu-Addo, *op. cit.*, p. 32 sq.)。

(18) たとえモデルがシミアスの替え玉であるとしても、描きつつある画家は(シミアスの替え玉)の本物をモデルとして(シミアスの替え玉)の像を描いていることになる。

(19) この類比で特に重要であると思われるのは、モデルが画家の動きを規制するものとして「描く」作用に内在する(という意味での対象)と解されるかぎりモデルは描く作用と不可分であるのと同様に、アイデアもそれが感性界に何かを作り出す作用(「技術」の意味合いでの知識、究極的にはプロネーシス(Plato)に内在する形(という意味での対象)と解されるかぎりアイデアはその作用と不可分であることになろう、という点である。ここから、想起説の今一つの著名な問題、すなわちアイデアの複数形とも見える「等しい物どもそのもの $\epsilon\acute{\upsilon}\rho\eta\tau\acute{\alpha}$ $\tau\acute{o}\nu$ $\tau\acute{\epsilon}\nu\tau\acute{o}\nu$ 」(47c)が何を指すのかという問題について一言すると、必ずしもこれがアイデアを指すと解さずともアイデアの想起という文脈を破壊せぬ解釈は可能であると予想される。

※ 本論の草稿は、一九九七年一月一日、日本倫理学会第四八回大会(九州大学)の自由課題研究発表表において発表された。文責は小野木にあることを断った上で、当該草稿について貴重な御意見・御質問を賜った、当日司会者の出村和彦氏をはじめ高橋雅人、谷隆一郎、田村公江、新島龍美、納富信留の各氏に、また本論に対し詳細なコメントを戴いた『名古屋大学哲学論集』編集委員会の匿名の編集委員の方に感謝の意を表したい。最後に、一昨年、本論の

中核を成す“類似性”の概念について討論の労を取って下さった神崎繁東京立大学助教に対する感謝の念を記しておきたい。